

本誌も本号をもって創刊滿二十三年を迎え、四十号を数えるに至った。四十号の歩みをたどりながら、既刊号のページをくくっていると、「学界の現状」で最も欠けているものは「文学理論の体系的把握」、「文学研究の方法論あるいは文学理論そのものへの追求」である、という文章が目についた。

第三十三号(昭43・2)掲載の国崎望久太郎博士「文学史像」の結びである。この指摘があつて十年を経た昨今、近代文学研究の分野で、文学研究のあり方、方法、

或いは研究資料についてなどをめぐる発言がさかんとなっている。

その一つは、谷沢永一の日本近代文学会昭和51年度春季大会(昭51・5・15)のシンポジウム「批評と研究の接点」における報告や『評言と構想』(朝川書店)第4輯(昭51・1)から第9輯(昭52

・4)掲載の「署名のある紙礫」などで論証のない恣意的な作品論を批判した一連の発言、次に三好行雄「文学のひろば」(文学 昭51・11)をきっかけに、本年5月まで『文学』誌上で展開された文献学の方法などについての三好と谷沢の議論の応酬、大江健三郎「現

近ごろ思ったこと

森 本 修

代文学研究者になにを望むか」(海 昭52・2)での詩学に立つた方法論の提唱があり、これらをもぐって賛否両論を交えて幾多の発言がなされている。

個々の発言の内容、論争の経緯については、紙幅の関係で省略するが、こういう論議はとかく、立

場の違いがあるとはいへ、揚げ足取りや水掛け論に終りがちである。学問、研究の場に相互批判が不可欠のものであることは、今更改めていうまでもない。本欄でも、屢々「討論」「対話」の必要が取り上げられているが、討論、対話はなれ合いであっても、いがみ合いであつてもならないし、相手をやりこめることに目的があるのではない筈である。昨年来の幾多の発言のなかには、この類のものが散見されるのは残念である。しかし、一方ではいくつかの新しい提言と、研究者への警告がみられる。これを無意義に終らせてはならない。

最近の近代文学研究の分野での動向をみて、文学研究のあり方、方法などについて、改めて考えてみなければならぬ問題の多様性をつくづく感じた。